いまかね教育かわら版
こんにちは教育委員会です ふたたび

No.２１９
２０２５（令和７）年５月９日発行
今金町教育委員会の会
文責：教育長　中山秀悦

自席の後ろの本棚から久々に、以前自分が書いてきた文章や発行物を手に取り眺めていました。これまで２３年間読んできた書籍から自分が気に入った文章を書き抜いたものや、校長室だより、指導監だより。これら、ここしばらくきちんとは目にしていなかった文章たち。なにか懐かしい。

このかわら版も、もっと自分の職場の職員の良いところとか書きたくて出そうと思ったものなのだけれど、そう成り切れていなくて……。



教えることをためらわない

今年の教育行政執行方針にこの言葉を使いました。

「子どもを主語に」と言われる時代に逆行しようなどというのではありません。ただ、往々にして“教育は繰り返す”と言われることも当事者として頭の片隅にあります。

これまでも、授業は『個に始まり、もみ合い、解決して個に戻す。定着させる』という基盤はあったと思います。ただ、課題設定を子ども任せにしたり、子どもの興味・関心が学習指導要領のねらいから遠くても、そこには目をつぶり、“活動ありき”の「這い回る授業」に終始してしまったりということがあって批判されたことがあったのも事実だと思います。

ちなみに、学力低下論と並行して世間で言われていた「ゆとり世代」という言葉があります。我が子たちもその世代ではありますが、何人かの教育関係者が言われているように、文科省自体は一度も“ゆとり教育”と言ったことはなく、もちろん我々も現場で円周率を３で教えたことも、徒競走で手を繋がせてゴールさせたこともありません。象徴的な虚報の発信源は私学受験を勧誘する進学塾のキャッチコピーにあったようですし、PISA の調査で成績が回復したのは９８年版学習指導要領で学んだ生徒。つまり世間で言われていた「ゆとり世代」だということは、意外と報道もされてはいません。一度発信したことに対して訂正というのはなかなかされないものです。そう言われていた世代は傷つき、世間では未だに誤解している人も多いのにも関わらず。

私が言う「教えることをためらわない」とは、子ども主体に学ばせる環境を創りながら、学習指導要領のねらいに到達させるということであり、そこには当然「教師の考え」がなければ、教師の存在する意味がないという意味です。

教師や授業、もっと言えば学校を必ずしも経由することなく、子ども（主語）の主体的・自律的な学びを主張する声もあるかもしれませんが、それは学級集団や協働性を排して子どもが孤立して学ぶことではないのです。そして、まずは新たな学びの場を作らなくても学校を、学校教育を充実させることが私の職にとっての第一義だと考えるからです。

全国で学校に気が向かない子が３４万人以上という数字に、元教師、教育関係者として申し訳ないと心が痛みます。ただ、学校で共に学ぶということの意味、価値や教職員の役割が問われる昨今にあって、子どもたちと学校生活を共に過ごし、彼らの学びや成長を目的、喜びとして関われる教職員、教育関係者ゆえにできること。大人としての経験者、心の伴走者としての「教えること」を、ためらっては存在する意味がないだろう、と。そう考えているのです。

子どもたちの将来、未来のために我々が直接的、間接的にやれることは、まだまだあります。